

ヘーゲル『精神現象学』の受容史

飛 田 満

ヘーゲルの主著『精神現象学』は、彼の全著作中、最も魅力的な、しかしまた最も謎に満ちた著作である。実際、この著作について研究する者は、ただちにこの著作の理念や成立や構成に関する錯綜した問題状況に突き当たる。にもかかわらず、この著作は、その豊かな内実によって、それに触れる者の心を捕えて容易には放そうとしない。このことは、この著作の度重なるテキストの刊行や、夥しい二次的文献の集積が物語っている通りである。

小論の目的は、ヘーゲルの『精神現象学』の出版直後から約150年間（1807～1960）の受容史（研究史・影響史）を概観し、その趨勢におおよそその見通しをつけることである。

小論の考察は、次の順序で進められる。まず予備的考察として、『精神現象学』の体系内の位置づけや他の諸学との関係について、ヘーゲル自身がどのように考えていたのかを発展史的に追跡する。つぎに『精神現象学』をめぐる同時代人の評価を一瞥したのち、19世紀のヘーゲル学派と反ヘーゲル的な後期観念論による解釈、および20世紀前半の新ヘーゲル主義による解釈について論じる。さらにヘーゲル左派から発展したマルクス主義的な解釈と、フランスを中心とした実存主義的な解釈やハイデッガーによる解釈、および英米圏における古典的な研究について検討する。

第1節 『精神現象学』の体系的な位置

(1) 『精神現象学』の当初の位置づけ

1807年6月28日と7月9日の『バンベルク新聞』、および10月28日の『イェーナ一般文芸新聞』、さらに11月25日のハレとライプツィヒの『一般文芸新聞』のそれぞれ新刊書案内の欄に、ヘーゲル自身が書いたと思われる出版広告が掲載された。

「バンベルクとヴェルツブルクのヨーゼフ・アントン・ゲープハルト書店から、次の書籍が出版され、信頼できるすべての書店に発送された。すなわち、G. W. F. ヘーゲルの学の体系。第一巻、精神現象学。八折判。1807年。定価6フロリン。この第一巻は、生成する知を叙述している。知の基礎づけに関する心理学的な説明あるいは抽象的な論議に代わって、精神現象学が登場しなければならない。それは学への準備をある視点から考察するものであるが、この視点に立つことによって、それは一つの新しい興味ある学となり、また哲学の第一の学となる。それは様々な精神の形態を旅路の宿駅として自らのうちに含み、この旅路を経ることによって、精神は純粹知あるいは絶対精神となる。したがって、この学の主要区分、それがまたいくつかの区分に分かれるところのこの

主要区分において考察されるのは、以下のものである。すなわち、意識、自己意識、観察し行わず理性、人倫的、教養的、道徳的な精神としての精神そのもの、そして最後に様々な形式における宗教的な精神である。一見したところ混沌のごとくに現れる精神の諸現象の豊かさが一つの学的な秩序へともたらされ、この秩序によって精神の諸現象がそれらの必然性に従って叙述される。そしてこの必然性においては不完全なものは解消し、その次の真理であるところのより高次のものへと移行する。かかる精神の諸現象が究極の真理を見出すのは、まず宗教においてであり、それから全体の帰結としての学においてである。(……) 第二巻は、思弁哲学としての論理学の体系と、哲学の残りの二つの部門の体系、すなわち自然の学と精神の学とを含むことになろう⁽¹⁾。

この出版広告の成立事情に関して、詳しいことは知られていないが、この広告の出し手がヘーゲルであったことだけは、ほぼ確実である。というのは、この広告が最初に出たのは『バンベルク新聞』であるが、ヘーゲルはその当時、すでにイエーナを去って、この新聞の編集者として働いていたからである。いずれにせよ、この広告文は、ヘーゲルの『精神現象学』という難解な著作の目的や課題、区分や構成、さらにはこの著作の体系内の位置づけや他の諸学との関係などを、いとも簡潔にかつまた平易に語っている点で、この著作が提起する数々の解釈上の問題を我々が考えるうえで抛るべき一つの貴重な資料であると思われる。

さて、『精神現象学』は当初、正確には『学の体系』と題された著作の「第一部」として公刊された⁽²⁾。そしてこのあと計画では、さらに「論理学」と「自然の学」および「精神の学」を含む「第二部」が出版されることになっていた。しかもヘーゲルによれば、『精神現象学』はたんに体系の「第一部」であるだけでなく、同時に体系への「導入部」でもあるように構想されていた。言い換えれば、『精神現象学』は体系の一部であり、かつ体系の序論でもあるように位置づけられていた。1807年5月1日付のシェリング宛書簡のなかで、ヘーゲルはようやく完成した自分の著作を発送する旨を伝えながら、次のように書いている。「本来は導入部であるところのこの第一部の理念について君が何と言うか知りたいと思っている」⁽³⁾。

ところが、その同じ書簡のなかで、ヘーゲルはすでに、「細部に入り込む努力が全体の見通しを損なった」ことを認めるとともに、とくに「最後の部分のかなりひどい不恰好」について不本意としながらも、これに関しては、「編集がイエーナでの戦闘の前夜半に終わった」ことを酌量してくれるようにと乞うている。のみならず、彼はまたそのさい、「出版や印刷の全過程を支配し、一部では構成をさえも支配するような不幸な混乱が生じた」ことを嘆いてもいる。ここに、ヘーゲルが『精神現象学』の刊行の段階においてすでにこの著作の弁解と推敲の必要性を感じていたことは明らかである。

(2)『精神現象学』の位置づけの変遷

ヘーゲルは、1812年に出版された『論理学』第一版においては、まだ「精神現象学」を内容とする「学の体系の第一部」のあとに、「論理学」と「自然哲学」および「精神哲学」を内容とし、体系を完結する第二部が続く予定であったが、とりあえず別個に「論理学」だけを公刊する⁽⁴⁾、と記している。これに対して、1831年に改訂された『論理学』第二版においては、もはや『精神現象

学』の第二版には「学の体系の第一部」という表題を添えないつもりであり、したがって、これに続く予定であった体系の第二部の代わりとして『哲学的諸学のエンツュクロペディー』を公刊した⁽⁶⁾、と断わっている。いったい、こうした『精神現象学』をめぐるヘーゲルの体系構想の変化は、いついかなる仕方で起こったのか。

ヘーゲルは、ニュルンベルクのギムナジウムの校長兼教授として、その最初の年度の1808/09年に、「哲学入門」としての「プノイマトロギー」(Pneumatologie)あるいは「精神論」(Geisteslehre)の講義を行なった。そのさい彼は、この講義のなかで当初は、まだ出版されて間もない『精神現象学』の全体を概略的に論じるつもりでいた。だが実際には、教育的配慮から彼はこの講義を「理性」のはじめのところで中断し、そこから次の規定教科としての「論理学」へと移行しなければならなかった⁽⁶⁾。ところが彼は、この「意識」「自己意識」「理性」という最初の三章に限定された『精神現象学』を、その後もたびたび(正確には4回)ギムナジウムの「哲学予備学」の講義に活用した⁽⁷⁾。こうして『精神現象学』は、ニュルンベルク時代には、なるほど形式的にはなお体系の「導入部」であるところの「第一部」という理念に従っていたが、しかし内容的にはすでに後年の『エンツュクロペディー』体系の「精神哲学」の一部分であるところの「精神現象学」以上の何ものもはや含まぬものとなっていた。だが修正は、ただこれだけにはとどまらなかった。

ヘーゲルは、1817年にハイデルベルクで刊行された『エンツュクロペディー』第一版のなかで、すでにこの形式的な側面、すなわち体系全体に対して『精神現象学』が占める位置にも決定的な修正を施した。すなわち彼は、この著作における「意識の学的な歴史」は「絶対的な始元ではなく、哲学の円環内部の一項であるにすぎない」と言明するとともに⁽⁸⁾、この学を初めて体系の第三部としての「精神哲学」のなかに組み込んだ。(周知のように、『エンツュクロペディー』の第三部「精神哲学」は、第一編「主観的精神」(人間学・精神現象学・心理学)、第二編「客観的精神」(法・道徳・人倫)、第三編「絶対的精神」(芸術・啓示宗教・哲学)から構成されている)。こうして、のちの『エンツュクロペディー』(第二版1827年、第三版1830年、いずれもベルリン刊)の体系が、ここでほぼ完全にでき上がったことになる。

とはいうものの、彼が例えばベルリン版『エンツュクロペディー』のなかで次のように語るとき、彼はなお『精神現象学』の理念を捨て切れずにいるようにも思われる。すなわち、「その出版のさいに学の体系の第一部と呼ばれた私の精神現象学においては、精神の最初の最も単純な現象である直接的意識から始めて、この精神の弁証法を哲学知の立場にまで発展させ、この立場の必然性をこうした進展によって示すという方法が採られた。しかしながらそうするためには、単なる意識の形式にとどまることはできなかった。というのは、哲学知の立場は同時にそれ自身で最も内容豊かな最も具体的な立場であり、したがって、それが成果として現れてくる場合には、例えば道徳、人倫、芸術、宗教など、意識の具体的な諸形態を前提しているからである。(……)そこで、このことによって叙述はいっそう複雑となり、[哲学の]具体的な諸部分に属するものが、一部すでにかの序論のうちにも入ってくることになるのである」⁽⁹⁾。こうしたヘーゲルの言い回しには、たしかに体

系の「導入部」でありかつ「第一部」でもあるところの『精神現象学』の理念と、そうした理念を担うが故に、この学が背負い込むところの「複雑さ」とが、遠回しにはあるが語り出されていると言えよう。

ヘーゲルは、1831年に『精神現象学』第二版のための改訂を試みた。この改訂は、彼自身の急逝のために、僅かに「序文」の途中（第31段）にまでしか及ばなかったが、それでも第一版で例えば、“diese Phänomenologie des Geistes, als der erste Teil des Systems” (24) とあるところは、この改訂により、実際に als 以下の部分が削除された。

ヘーゲルは、まさにこの頃に、かの『論理学』の第二版のための改訂を同時に行なっていたのである。とはいえ、また非常に興味深いことに、ヘーゲルはこの『精神現象学』の第二版のための「覚え書き」(Notiz) のなかで、この著作をもって「学の特定遺贈分」(Voraus der Wissenschaft) すなわち「手をつけてはならない固有の初期著作」⁽⁴⁰⁾である、とも書きつけている。ヘーゲルは、まさに死の直前まで、体系全体におけるこの著作の位置づけを相対化しながらも、同時にその変わらぬ意義を正当化しようとしていたのである。

(3)小 括

結論的に言って、ヘーゲルの『精神現象学』に対する自己評価は、きわめて曖昧であり、またそれどころか首尾一貫性に欠けている。彼は、一方でこの著作から距離をとり、それを体系から締め出すが、しかし他方ではそれを決して全面的に否認しはしない。また彼は、一方ではこの著作を換骨奪胎しながらも、他方ではやはりそれをそのままの形で保とうとする。だが、こうしたヘーゲル自身の不明瞭な態度のために、やがてこの著作を研究する者たちにとっては不可避免的に多くの解釈上の問題が生ずることになる。

第2節 ヘーゲル学派から新ヘーゲル主義まで

(1)同時代人の評価

『精神現象学』は、決してつねに今日のようにヘーゲル哲学への関心の中心点に位置していたのではない。むしろこの著作は、彼の死後、おくれればせながらしだいに顧みられ、また論じられるようになったのである。とはいえこの著作は、ヘーゲルの友人や弟子たちの間では、すでにその出版直後からその意義について論じられていた。例えば、G. H. フォン・シューベルトによれば、『精神現象学』は哲学の分野における「最も驚嘆された文学上の出来事の一つ」であった。またTh. J. ゼーベックは、「序文」を気に入り、それをすぐれた書き振りだとヘーゲルに書き送っている。さらにK. L. フォン・クネーベルは、この著作を称賛し、ヘーゲルを同時代の筆頭の思想家の一人とさえ見なしているが、しかしまた彼は著作の明瞭さの欠如を非難してもいる。またオランダの聴講生ファン・ゲルトは、オランダにおいて『精神現象学』以上に普及を見た哲学的著作はなかったと報告しながらも、著作の不可解さについて嘆き訴えている⁽⁴¹⁾。

さらにこのような書簡による意見表明に加えて、K. I. ヴィンディッシュマンとK. F. バッハマンによる同時代人の二つの有名な書評が現れた。このうちK. I. ヴィンディッシュマンによる

広範な書評は、1809年の『イエーナ一般文芸新聞』に現れたが、その書評はテキストを主として報告し、あるいは抜粋の形で再現したものである。その書評は綿密な読解の成果であるとは言えるが、その根底に著作の批判的な理解というものが無い。ヴィンディッシュマンの誤った解釈は、一面的に宗教的な視点に基づいている、とボンジーベンは断じている。それからK. F. バッハマンによる書評は、1810年に『ハイデルベルク文芸年報』に現れたが、その書評は入門的性格をもつものである。その書評は「序文」の学問的意義を指摘しているが、「緒論」の方法的思索には立ち入らない。バッハマンがシェリングをプラトンと、ヘーゲルをアリストテレスと比較しているのは、ヘーゲルが自分の哲学とシェリングの哲学との違いについて「哲学史」講義のなかで通俗化した形で示した判断が反映していると思われる⁽¹²⁾。

なお反対の見方を主張していて興味深いのは、ジャン・パウルとJ. F. フリースである。ジャン・パウルは、『精神現象学』の「明晰さと文体と自由と力強さ」に驚き、「洞察力の鋭さ」の点でヘーゲルはいまやほとんど第一人者だと記している。これに対してJ. F. フリースは、『精神現象学』をその言語のために「ほとんど読むに堪えない」と批判しながらも、この著作の根本思想（人間精神の普遍的歴史の展開と自然哲学の精神の側での完成）を明確に捉え、しかもヘーゲルは流れのなかでの真理しか知らないが、あらゆる世界観の頂点に絶対知を据えることによって、彼は自ら自身に矛盾している、と看破している⁽¹³⁾。

(2)ヘーゲル学派

さて、ヘーゲル学派のうちで、『精神現象学』にとくに関心を抱き、またその根本思想の継続を企図したのは、G. A. ガープラーとH. F. W. ヒンリッヒス、およびカール・ローゼンクランツである。

このうちヘーゲルのイエーナでの最古参の学生であり、また彼のベルリンでの講座の後継者ともなったG. A. ガープラーは、1827年に、「理論哲学の体系」の第一部としての「哲学予備学」を出版したが、この著作に彼は『学への序論としての哲学的予備学の教科書』という標題を与えている。しかも彼は、この予備学の第一編を「意識の批判」にあてるとともに（そして実際には、この第一編だけが出版されたのであるが）、この批判の第一章で、「意識一般」について概略的に述べたあとで、つづく第二章で「現象する意識あるいは現象学的意識」としての「意識」「自己意識」「理性」についてきわめて詳細に段階的に論じている。しかしながら彼のこうした試みは、結局のところは『精神現象学』の良く言えば注釈的な敷衍に、また悪く言えば通俗的な模倣に尽きている⁽¹⁴⁾。

ガープラーがヘーゲルに直接に従って『精神現象学』を「予備学」へと変形したとすれば、ヘーゲルのハイデルベルク時代の弟子の一人であったH. F. W. ヒンリッヒスは、やや自立的な仕方で『精神現象学』を「心理学」へと変形した。彼は、その著書『知の発生』のなかで、「直接知」から「反省知」をへて「絶対知」にいたる「精神の形而上学」としての「認識の心理的發展」を描いている。というのは、彼によれば、ヘーゲルは認識をたしかに現象学のおよび論理的には展開したが、しかしこれを「精神そのものに固有な諸規定の形式」においては展開しなかったからである⁽¹⁵⁾。

カール・ローゼンクランツは、ただちにヘーゲルの弟子とは言い難いが、彼はその名著『ヘーゲルの生涯』のなかで、『精神現象学』に一章を捧げ、それに「1807年までの体系の現象学的危機」という題名を与えている。そこで彼が述べるところによれば、ヘーゲルは『精神現象学』のなかで、体系のモメントであるはずの意識を体系から取り出して、それをあらかじめ教育学的な理由から取り扱った。ところがヘーゲルは、そのさい「意識の具体的な内容の広がり全体にわたって目を通し、そのなかで当時の哲学に対する批判と世界史の哲学とを混ぜ合わせた」。かくしてヘーゲルは、『精神現象学』によって体系のモメントにすぎない意識を不当に拡張してしまったという⁽¹⁶⁾。

その他、ヘーゲル学派のうちでは、カール・ダオプが『精神現象学』の熱心な読者として挙げられるが、彼は「現象学」について講義をし、その序論を印刷させるつもりだ、とヘーゲルに書き送っている。K. F. ゲッセルも『精神現象学』に関心を抱き、その著作『キリスト教的信仰認識との関係における無知と絶対知についてのアフォリズム』のなかで、現象学の諸テーマを取り上げている。そしてエドゥアルト・ガンズは、ヘーゲル追悼の辞のなかで、かの名文を刻み付けた。すなわち、「イエーナでの戦闘の轟音を聞きながら、ヘーゲルはその『精神現象学』を完成させた。そしてこの著作とともに、彼はシェリングの哲学的思考様式に永遠の別れを告げた」⁽¹⁷⁾。なおヘーゲル学派の偉業として、さらに彼らの手によって初めて『ヘーゲル全集』（「ベルリン版全集」）が刊行されたことも忘れてはならない。このうち『精神現象学』は、ヘーゲルの親友であったヨハンネス・シュルツェによって編集され、1832年に第一版が、また1841年には第二版がそれぞれ出版されている⁽¹⁸⁾。

(3)後期観念論など

ヘーゲル学派におけるよりも、もっと批判的で同時にもっと興味あるいくつかの『精神現象学』研究を、我々はI. H. フィヒテやCh. H. ヴァイセ、およびH. M. カリボイスなどの所謂「後期観念論」のなかに見ることができる。

このうち彼らの一種の共同研究の場としての『哲学・思弁神学雑誌』の編集者であったI. H. フィヒテ（J. G. フィヒテの子）は、ヘーゲルの『精神現象学』の目標を問題にして、これを観念的なものがあらゆる現実性の絶対的な原理であるということの証明を行なおうとする試みのうちに見出した。ところで彼によれば、ヘーゲルはこの証明を、实在哲学的に、つまり実在的な精神があらゆるもののうちにあるということの論証によって行なうこともできたし、また認識論的に、つまり我々の認識作用が客観性の本質を我がものとするということの論証によって行なうこともできた。しかしながらヘーゲルが我々に実際に提供したものは、この「両者 [二つの論証] からなる中途半端なもの」でしかなかったという⁽¹⁹⁾。

Ch. H. ヴァイセは、とりわけ体系の始元の問題との関連で、『精神現象学』に対して断固たる裁定を下している。すなわち彼によれば、『精神現象学』は、学への序論であるとしたら体系の一部ではなく、また体系の一部であるとしたら学への序論ではない。したがって、ヘーゲルの哲学的立場からすれば、反省と思弁の間には一つのサルト・モルターレしか存在しないという⁽²⁰⁾。

H. M. カリボイスは、とくに体系の第一部は現象学かそれとも論理学かという論争問題を、体

系の基礎的な第一部としての論理学に現象学的な形式を与えることによって解決しようとする。すなわち彼によれば、論理学あるいは形而上学は或る種の現象学でなければならない、言い換えると、それはなるほど客観的な真理の認識へと進んではいるが、しかし真理の主観的な根源をも絶えず覚えており、この真理の主観的な側面を客観的な側面とともに同時に方法論的に、すなわちまさに現象学的に保持しているような、そうした論理学でなければならないという⁽²¹⁾。

19世紀の後半になると、ヘーゲルの直接的な影響はすでに消え去り、人々はもはや彼と護教的に、あるいは批判的に対決するのではなく、むしろ彼を過去のものとして実証的に哲学史のなかに組み込み、あるいは位置づけることを開始した。ルドルフ・ハイムのかの有名な著作『ヘーゲルとその時代』は、ちょうどこの頃に書かれたものである。ハイムはこの著作のなかで、ヘーゲルの哲学がまさに『精神現象学』において、「それがなすべきことをなしえず、またあろうとするものではあらぬものだ」⁽²²⁾ということが明らかになると断言する。すなわち彼によれば、ヘーゲルは『精神現象学』をもって、カントの抽象的な超越論的哲学を実在的な歴史批判へと凝縮させようとしたが、実際には両者をただ混合させたにすぎなかった。なるほど『精神現象学』の緒論は、「絶対知」の超越論的・心理学的な証明を約束しているが、同書の結論は、これに対して歴史的な証明を行なったことを主張している。また我々は、たしかに『精神現象学』において、しばらくの間「意識」の分析を読むが、「自己意識」の敷居をまたぐやいなや、歴史的な諸形態に出会う。「だから現象学はパリンプセスト〔前の文字が透けて見える二度使用された羊皮紙〕になる。つまり我々は第一のテキストの上に、そしてその間に第二のテキストを見出す」⁽²³⁾。

とはいえハイムは、そのさい『精神現象学』を実際にパリンプセストとして、つまり一つの構想の背後にもう一つ別の構想が読み取れる作品として評価しているのではない。そうではなくて彼は、絶対知の二様の証明の混在を指摘しているのである。かくしてハイムが、明らかに上述のI. H. フィヒテの批判に従って述べるところによれば、「現象学は、つまるところ歴史によって混乱と無秩序へともたらされた心理学であり、また心理学によって破壊へともたらされた歴史である」⁽²⁴⁾。

(4)新ヘーゲル主義

20世紀に入ると、新カント学派の〈文化哲学〉とディルタイの〈生の哲学〉とを背景にして、ハイム以後ほとんど顧みられることがなかったヘーゲルへの関心が再び呼び覚まされた。この所謂〈新ヘーゲル主義〉は、〈ヘーゲル・ルネッサンス〉⁽²⁵⁾を旗印に、たちまちヨーロッパ諸国に広がり、すでに30年代には、ほぼその頂点に達した。とりわけドイツでは、この時期に、ゲオルク・ラッソン、リヒャルト・クローナー、テオドア・ヘーリング、ヘルマン・グロックナーらが輩出し、こうした人々とともに『精神現象学』研究も、その面目を一新することになった。

まず1907年に、『精神現象学』の初版出版後百年を記念して、久しく絶版のままであったこの著作が、新たにゲオルク・ラッソンによって編集され出版された。この「記念版」への編者序論のなかで、彼はさっそくディルタイの初期ヘーゲル研究⁽²⁶⁾を受けて、ヘーゲル哲学の形成過程を辿るとともに、またハイムの所謂実証的なヘーゲル解釈を批判して、『精神現象学』の主題と方法、内容と構想との深みある叙述と再現とを試みている⁽²⁷⁾。

リヒャルト・クローナーの主著『カントからヘーゲルまで』は、ドイツ観念論の完成者としてのヘーゲルという図式を作り上げたことで有名である。彼はそのさいしかも、ヘーゲルは『精神現象学』において、カントとフィヒテの主観主義をシェリングによって到達された絶対的観念論の段階へと高めることによって更新した、つまり一種の認識論へと回帰した、という見解を唱えている⁽²⁸⁾。

ヘルマン・グロックナーは、ヘーゲル没後百年を記念して、全20巻からなるヘーゲル全集を刊行した。もちろん、このなかには『精神現象学』も含まれている。ただし、この全集は旧ベルリン版全集の翻刻版であるために、その文献学的な価値は乏しい。しかしながら、この全集に添えられたグロックナー自身の手になる二巻のヘーゲル研究書（『ヘーゲル』）と、四巻の『ヘーゲル・レキシコン』とは、まさにヘーゲル・ルネッサンスの所産である。彼は、その研究書の第二巻で、ヘーゲル哲学の「発展と運命」を辿り、そのさいヘーゲルにおける初期神学草稿からイエーナ批判論文をへて『精神現象学』へと至る「生ける哲学的思索」の線と、イエーナ講義草稿から『エンツュクロペディー』へと通ずる「死せる体系的思考」の線とを区別するという冒険的な解釈を企てている⁽²⁹⁾。

テオドア・ヘーリングの『精神現象学』の「成立史」に関する研究は、それまでの体系的な解釈が解明しえなかった諸問題を解決するための一つの新しい道を提示した。彼は、1933年にローマで開かれたヘーゲル・コンGRESの講演で、次のように述べている。「現象学は有機的に、そしてヘーゲルの綿密に考え抜かれ長いこと心に抱かれた計画に従って、彼の先行する発展から生じたものではなく、きわめて突然の、しかも内的・外的な圧迫の下になされた決意の結果として、ほとんど信じ難いほどの短期間に、一片一片かるうじて印刷のために物された書き下ろしとして生じたものであり、その間にもはや意図も同じものではありつづけなかった。全くそういう事情であるから名称のみならず、実際、著作の実質的な内容や範囲もまた印刷の間にようやく今日あるようなものとなった」⁽³⁰⁾。すなわちヘーリングによれば、ヘーゲルの著作は、当初はさしあたり「理性」の章にまで及ぶかぎりのきわめて短い「体系への序論」として計画された。ところが、執筆され印刷される間に、その序論はますます膨れ上がり、ついには多くの素材を「精神哲学」からも取り込んで絶対知にまで及ぶ「体系の一部」にまで拡大されたというのである。

ヘーリングによる文献学的に周到な発展史研究は、その後の『精神現象学』研究に多大の影響を及ぼした。その顕著な例としてラッソンのあとを継いで「哲学文庫」(Philosophische Bibliothek)版の新しい『精神現象学』を出版したヨハンネス・ホフマイスターは、その改訂版の編者序論のなかで、ほぼ完全にヘーリングのテーゼを受けいれて、自らこの著作の「成立史」の再構成を試みている。また彼がその同じ序論のなかで、この著作に関する書評の紹介や概念史的考察を行なっていることも、ヘーリング以降いかに文献学的・歴史的なものへの関心が深まったかをよく示している⁽³¹⁾。

このほか、ただちに新ヘーゲル主義のなかにも含めることはできないが、対象を『精神現象学』研究に限ってみても、この時代には、名だたる体系家の哲学史的著作に見るべきものが多い。例えば

ヘーゲル哲学の解説を通じて、ヘーゲル・ルネッサンスの先駆となったクーノ・フィッシャーの『近代哲学史』（第八巻）⁽³²⁾や、新カント学派から出発してヘーゲルの弁証法について独特の理解を示したニコライ・ハルトマンの『ドイツ観念論の哲学』（第二巻）⁽³³⁾などは、その典型である。

もう一つ、この時代に特徴的なこととして、なるほど『精神現象学』全体を論じたものではないが、まさに時代の要請⁽³⁴⁾として、この著作のすぐれた注釈的な研究が現れ始めたことも付け加えておかなければならない。その代表としては、ヴィルヘルム・プルプス⁽³⁵⁾とカスパー・ニンク⁽³⁶⁾の労作を挙げることができよう。

第3節 マルクス主義・実存主義・英米圏の研究

(1) マルクス主義的解釈

『精神現象学』研究は、一口に〈ヘーゲル学派〉と言っても、新ヘーゲル主義につながる右派あるいは中央派においてと、マルクス主義につながる左派においてとは、かなり趣を異にする。すなわち、前者がこの著作の文献学的に周到な、また哲学史的に厳密な研究をめざしたのに対して、後者はむしろ時事的あるいは実践的な問題の解明のために、この著作の研究に向かっている。

一般的に言って、ヘーゲルの体系に拘泥せず独自立場から出発するヘーゲル左派にとっては、当然のことながら、概説的な『エンツュクロペディー』よりも創造的な『精神現象学』のほうが、はるかに重要な意味をもっていた。なかでもとくに宗教批判の立場からヘーゲル学派を初めて三派に分類したD. F. シュトラウスは、『精神現象学』に対して、次のような最大の讃辞を捧げている。「現象学は、(……)ヘーゲルの著作のアルファでありオメガであると言うことができる。ここで初めて、ヘーゲルは自分自身の船で、もちろんオデュッセウスの航海ではあるが、世界周航に出帆した。その後の彼の遠征は、よりうまくいったにしても、いわば内海を動いていたにすぎない。後年のヘーゲルの著述や講義は、すべてただ現象学の数節にすぎず、その現象学の豊かな内容は、エンツュクロペディーのなかでさえ、ただ不完全に、そしていずれにせよ無味乾燥な状態で保存されているにすぎない。(……)現象学において、ヘーゲルの天才はその頂点に立つ」⁽³⁷⁾。

ルートヴィヒ・フォイエルバッハは、感性的直観との絶対的絶縁を前提とするヘーゲル哲学に対して最も根本的な批判を加えたことで有名である。だが、その彼も現象学に対しては、論理学に関する積極的・現代的な意義を容認する立場から、次のように問うている。「いったい論理学もまた再び現象学ではないのか。[論理学の始元とされる]存在は、現象学的な始元にすぎないのではないか。我々は論理学の内部でも、[現象学的な]仮象と真理との間の分裂のなかにはいるのではないか」⁽³⁸⁾。

カール・マルクスは、所謂『経済学・哲学草稿』のなかで、『精神現象学』を「ヘーゲル哲学の誕生地」と呼び、そこから「労働」と「疎外」の理論を学び取っている。すなわち彼によれば、「ヘーゲルの現象学とその最終的成果(……)とにおいて偉大なことは、とりわけヘーゲルが人間の自己産出を一つの過程として捉え、対象化を脱対象化として、つまり外化として、そしてこの外化の止揚として捉えていること、かくして彼が労働の本質を捉え、対象的な人間を、つまり現実的

なるが故に真なる人間を人間自身の労働の成果として概念的に把握していることである」⁽³⁹⁾。

このマルクスの『精神現象学』研究を介して、最近のマルクス主義的な思想家たちは、まさに『精神現象学』のヘーゲルのなかに、マルクス自身がまだ与えなかった弁証法的な歴史把握の人間学的な基礎づけを求めている。ジェルジ・ルカーチ、ヘルベルト・マルクーゼ、エルンスト・ブロッホなどがこの立場を代表する。

このうちハンガリーのマルクシスト、ジェルジ・ルカーチは、その著書『若きヘーゲル』⁽⁴⁰⁾のなかで、『精神現象学』に至るまでの初期ヘーゲルにおける「弁証法」の発展を、当時の政治的・経済的・社会的な過程との連関において明らかにした。そのさいルカーチにとってとくに重要であったのは、ヘーゲルの思想において所謂ブルジョワ的・資本主義的な社会がいかに反省されているかを見極めることであった。したがって、彼の『精神現象学』解釈は、一義的に史的唯物論的であり、またイデオロギー批判的である。そしてもう一つ特筆すべきことは、彼が「外化」(Entäußerung)をもって『精神現象学』における「哲学的中心概念」として規定したことである。

ヘルベルト・マルクーゼがハイデッガーの影響下にディルタイとの関連において著した『ヘーゲルの存在論と歴史性の理論の基礎づけ』⁽⁴¹⁾のなかには、『精神現象学』における「生命」の概念についての詳細な分析が含まれている。これに対して、彼がナチスの迫害のためにアメリカに亡命した後公刊した第二のヘーゲル研究書『理性と革命』⁽⁴²⁾のなかには、一転してマルクスへの関係が強調されたヘーゲル解釈が見られる。とりわけ後者において、彼は、『精神現象学』における意識の弁証法がいかに内在的に実証主義への批判と物象化理論の端緒とを具えているかを示そうとした。なおマルクーゼのヘーゲル＝マルクス研究に関して言えば、彼は、かの『経済学・哲学草稿』の刊行と同年に、この草稿に関する重要な論文⁽⁴³⁾を発表している。

エルンスト・ブロッホのヘーゲル解説書『主観－客観』⁽⁴⁴⁾は、経済学批判に踏み込むルカーチや物象化理論を持ち出すマルクーゼの立場ほどには、マルクス主義的ではない。彼はこの著作のなかで、『精神現象学』における三つのモチーフ(活動的・革命的な自我と合理的・資本主義的な自我と歴史的・ロマン主義的な知としての主観と客観の統一)と二重のアスペクト(全くマルクス的な意味での人間の労働の歴史と他のマルクス主義的な解釈においては表現されない特殊な主観性の機能)について論じている。なおこの著作のテーゼを補うものとして、ブロッホはさらに『精神現象学のファウスト・モチーフ』⁽⁴⁵⁾という論文を著している。

(2)実存主義的解釈

新ヘーゲル主義の運動に少し遅れて、フランスでは、一方でマルクスの初期思想が知られ、他方でケルケゴールやハイデッガーの実存哲学が広まるに及んで、とくに実存主義的な『精神現象学』研究が現れた。ジャン・ヴァール、アレクサンドル・コジェーヴ、ジャン・イポリットなどがこの立場を代表する。

このうちジャン・ヴァールは、ヘーゲルの『初期神学論集』の研究から出発して、『精神現象学』の「不幸な意識」というキリスト教的・ロマン主義的な意識形態のなかに、すでにセーレン・ケルケゴールの最も重要なテーマが先取りされているのを発見した。すなわち彼によれば、自らのう

ちで矛盾した主観性としてのこの「不幸な意識」は、同時に人間の実存の否定性の普遍的経験を体現したものであり、したがってまたそれは、『精神現象学』全体の弁証法的発展の基礎となるものである。とはいうものの、かかる「不幸な意識」について語るヘーゲルは、ヴァールによれば、もちろん決してニヒリストでもアンチ・ラショナリストでもない。むしろヘーゲルは、ここで「キリスト教とロマン主義との合理化」を求め、同時に「合理的なもののキリスト教化あるいはロマン主義化」を求めている⁽⁴⁶⁾。

フランスに亡命したロシア人、アレクサンドル・コジェーヴは、1933年から39年にかけて、パリの高等研究院でヘーゲル哲学についての講義を行なったが、その講義のなかで、彼は『精神現象学』をテキストに、まだ公刊されてまもないマルクスの『経済学・哲学草稿』とハイデッガーの『存在と時間』とを取り入れて、一種の「歴史的人間学」を作り上げようと試みた。そしてそのさい、このコジェーヴの『精神現象学』解釈の出発点となったのが、同書における「自己意識」の章の「主人と奴隷」の弁証法である。彼は、はっきりと次のように告げている。「世界史は、闘争する主人と労働する奴隷との間の相互作用の歴史である」。そうである以上、コジェーヴによれば、歴史は主人と奴隷との間の対立が止む瞬間において完結する。しかもこの歴史の完結は、具体的にはフランス革命と、それによって招来されるナポレオン戦争において実現する⁽⁴⁷⁾。

コジェーヴの『精神現象学』解釈は、実存主義的である以上にマルクス主義的であり、またもっとよく言えば人間主義的である。彼がフランスにおけるヘーゲル哲学の「現代化」のために果たした功績は、ことのほか大きい。ジャン・ポール・サルトル、モーリス・メルロ＝ポンティ、ジャン・イポリットなどは、いずれも彼の影響下にあった思想家である。なかでもとくにジャン・イポリットは、サルトルやメルロ＝ポンティが存在論的あるいは現象学的な立場から『精神現象学』の独創的な解釈⁽⁴⁸⁾を試みたのとは対照的に、むしろ自分の立場と研究とをひとまず区別して同書の内在的な理解を試みた。彼による『精神現象学』の精確な仏訳⁽⁴⁹⁾と綿密な注釈⁽⁵⁰⁾は、今日でも最もすぐれたヘーゲル研究書の一つに数え入れられる。

マルティン・ハイデッガーは、周知のように、その主著『存在と時間』⁽⁵¹⁾のなかで、「現存在」としての人間が「死に向かう存在」であること、そしてこの死を「先駆的決意性」のもとに引き受けることが人間の本来的な在り方としての「実存」であることを明らかにした。コジェーヴが彼のヘーゲル解釈のためにハイデッガーを問題にしたのは、まさにこの視角からである。ところがこれに対して、ハイデッガー自身がヘーゲルの、とりわけ『精神現象学』の解釈を試みたのは、ようやく彼の所謂<転回>以後のことであった。

ハイデッガーは、1942/43年に『精神現象学』の「緒論」に関する段落ごとの詳細な注釈を著わし、これを1950年に「ヘーゲルの経験概念」という表題のもとに公けにした⁽⁵²⁾。そのなかで彼は、ヘーゲルをアリストテレスに関連づけ、また『精神現象学』の「緒論」を西洋形而上学の断片と見なして、そこに例えば絶対者の「パルウーシア」（臨現）の諸形態の取り集めや、このパルウーシアの「近代的主観性」の形式における概念把握を読み込んでいる。とはいえ、はたしてそうした解釈が、「緒論」のコンテクストから可能かどうか、またかりに可能であるとしても、『精神現象学』

全体を通じて可能かどうか、という問題は残るであろう。

しかしながら、ハイデッガーの『精神現象学』研究には、その後知られることになった別の側面がある。すなわち、1980年に『全集』の第32巻として公刊された、1930/31年の彼の講義『ヘーゲルの精神現象学』⁽⁵⁵⁾が、それである。彼はこの講義のなかで、なるほど「自己意識」の章に入ったところで解釈を打ち切ってしまっているが、しかしこの講義の導入部では、「現象学体系」と「エンツュクロペディー体系」との関係や、二つの表題（「意識の経験の学」と「精神の現象学の学」）によって特徴づけられた「体系の第一部」の意味などについての考察を、十分に文献学的な議論を踏まえて行なっている。

ハイデッガーによれば、ヘーゲルの『精神現象学』は、今日的な意味での現象学でもなければ、哲学的な諸立場の類型論でもなく、また哲学への導入でもない。そうではなくて『精神現象学』とは、西洋哲学の主導的かつ根本的な問いから要求され、またドイツ観念論によって絶対的なものとして認識された「理性の絶対的な自己叙述」である。したがってまたハイデッガーの定式化によれば、『精神現象学』は絶対者とともに絶対的に始まる」。そしてこのことが生起し、また実際生起しなければならないという必然性によってヘーゲルは、またフィヒテやシェリングも同様に駆り立てられている、というのである⁽⁵⁴⁾。

(3) 英米圏の研究

『精神現象学』の英訳が現れたのは1910年のことである⁽⁵⁵⁾。翻訳者のJ. B. ベイリーは、ブラッドリー、ポーザンケト、ケアード、ウォレス、マクタガートらとともに、イギリスの新ヘーゲル主義の代表者としても知られる。1977年には、A. V. ミラーによる新しい英訳が出たが⁽⁵⁶⁾、ベイリー以後の英米圏における『精神現象学』研究は、この文化圏の分析的伝統に基づいて、とくに明晰な言語による簡潔な論評にすぐれたものが多い。ここでは、そのなかからすでに古典的となったJ. N. フィンドレイ、リチャード・ノーマン、ハワード・カインツの研究を取り上げてみる。

J. N. フィンドレイは、ヴィトゲンシュタインをはじめとする論理実証主義から出発して、ヘーゲル哲学が分析哲学に対立したのではなく、むしろ分析的な方法によって、その現代的意義（例えば弁証法的思考の）が理解されるものであることを示そうとする。とりわけ彼がその主著『ヘーゲル——再検討——』のなかでめざしているのは、ヘーゲルをもって、経験的世界を超越した彼岸的事物に関わる形而上学者であるとする「誤解」を退けて、むしろヘーゲルに、常識と科学が対象とする現実的世界に関わる経験主義者であるとする評価を与えることである⁽⁵⁷⁾。なおフィンドレイはまたミラーの英訳に「序論」を付すと同時に「分析」(Analysis) と呼ばれるパラグラフごとの短い要約を補っている。

リチャード・ノーマンは、イギリス哲学の分析的伝統に飽き足らず、むしろそうした立場から自覚的に抜け出そうとする。そのために彼がとる方途は、まずもって歴史的展望を拡大しながら哲学の本質を探求することであり、またそのさいとくに政治的関心と哲学的探求との間のアカデミックな絶縁状況を排除すべく、それらの間の明確な接点を提供するヘーゲル哲学の、とりわけ『精神現象学』の哲学的価値を立証することである。そうしたノーマンの意図は、彼が例えばヘーゲルの

『精神現象学』における認識論批判との関連で、ロック、ヒューム、ラッセル、エイヤー等における伝統的な認識論の妥当性に再検討を加えていることから窺われる⁽⁵⁸⁾。

ハワード・カインツの二巻本『ヘーゲルの精神現象学』の主要な目的は、彼自らが述べるところによれば、『精神現象学』において「ヘーゲルが語っていることについての筋の通った読むに値する説明」を与えることである。この目的を達成するために彼は、『精神現象学』のテキストの「分析」（ヘーゲルの論証をできるだけ明瞭に、かつ整然と平易に言い替えること）と「注釈」（この分析を補うために言わば「脚注」のように言い足すこと）を試みている。さらに彼は、この「分析」と「注釈」に先立って、『精神現象学』全体に関連するいくつかの問題について詳細な考察を行なっている。その問題というのは、次のようなものである。1. 現象学の叙述の形式はどんなものか。2. 現象学の構想はどんなものか。3. 現象学は体系の序論か、その一部か、あるいは両者か。4. 現象学の主題はなにか。5. 主観的でも客観的でもない或る有利な地点を選択することは可能か。6. 現象学の諸契機を連結する「弁証法的必然性」の意味はなにか。7. 現象学のコンテキストにおける「経験」の意味はなにか。8. 意識はどのようにして測定するものであるとともに測定されるものであることができるのか。9. 研究される見地と「現象学者」の見地との関係はどんなものか。10. ヘーゲル的な意味における「現象学」とはなにか⁽⁵⁹⁾。

なおこのほかにも、英米圏の古典的な『精神現象学』研究として優れたものが多いが、ここではさらにウォルター・カウフマン⁽⁶⁰⁾、ヤーコブ・レーウェンバーグ⁽⁶¹⁾、メロルド・ウェストフェル⁽⁶²⁾らによる明快な論評があることを、あわせて指摘しておきたい。

以上、『精神現象学』の出版直後から約150年間のこの著作の受容史を、初期の書評からヘーゲル学派、後期観念論をへて新ヘーゲル主義まで、そしてマルクス主義的・実存主義的解釈から英米圏の古典的研究まで辿ってみたが、そもそも『精神現象学』に関する二次的文献の量は膨大至極であって、それらすべてを取り上げて論じることなどは、ほとんど不可能に近い。そこで論評にあたっては或る基準を設けて文献を選択するという戦略がとられることになるが、そうした研究史の研究は、例えば（すでに古くなったが）ハンス・フリードリッヒ・フルダとディーター・ヘンリッヒの『ヘーゲルの精神現象学のための資料集』の序論と、ゲアハルト・ゲーラーの「現象学解釈のための最も重要な幾つかの端緒」という評論において或る程度の成功を収めている⁽⁶³⁾。

ところで、ヘーゲル研究は（したがって『精神現象学』研究もまた）ドイツにおいて、1960年代以降、ヘーゲル・アルヒーフの創設と国際ヘーゲル連盟の設立とを背景に飛躍的な発展を遂げた。とくに『精神現象学』に関して言えば、一方では、より厳密な文献学的考証に基づく新たなテキストの諸版が刊行され、他方では、この著作の理念や成立、構成や論理に関する綿密な研究が次々と発表された。小論ではおもにそれ以前の研究史・受容史に焦点を当てて考察したわけであるが、こうした20世紀後半の新しい研究成果については稿を改めて論じられなければならない⁽⁶⁴⁾。

【注】

- (1) G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes, Hegel Gesammelte Werke 9*, hrsg. v. W. Bonsiepen u. R. Heede, Hamburg 1980, Beilagen, S.446f.
- (2) G. W. F. Hegel, *System der Wissenschaft. Erster Teil, die Phänomenologie des Geistes*, Bamberg u. Würzburg 1807. なお、初版の背表紙（私がミュンヘンのバイエルン国立図書館で閲覧したもの）には、“Hegel Wissenschaft 1”とだけ書かれていた。
- (3) *Briefe von und an Hegel Bd. 1*, hrsg. v. J. Hoffmeister, Hamburg 1952, S.161f.
- (4) G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik, Hegel Werke in zwanzig Bänden 5*, hrsg. v. E. Moldenhauer u. K. M. Michel, Frankfurt a. M. 1970, S.18.
- (5) G. W. F. Hegel, a. a. O., S. 18 (in Anmerkung) .
- (6) G. W. F. Hegel, *Nürnberger und Heidelberger Schriften, Hegel Werke in zwanzig Bänden 4*, S. 70-85. Vgl. O. Pöggeler, *Zur Deutung der Phänomenologie des Geistes*, in: *Hegel-Studien 1*, S.276.
- (7) G. W. F. Hegel, a. a. O., S.294-302.
- (8) G. W. F. Hegel, *Encyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse, Sämtliche Werke 6*, hrsg. v. H. Glockner, Stuttgart 1938, § 36.
- (9) G. W. F. Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse, Hegel Werke in zwanzig Bänden 8*, § 25.
- (10) G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes, Hegel Gesammelte Werke 9*, Beilagen, S.448.
- (11) Wolfgang Bonsiepen, *Einleitung*, in: *G. W. F. Hegel, Phänomenologie des Geistes*, hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Hamburg 1988, S. LV u. LIX. Vgl. *Ders, Erste zeitgenössische Rezensionen der Phänomenologie des Geistes*, in: *Hegel-Studien 14*, Bonn 1979, S.35f.
- (12) Wolfgang Bonsiepen, a. a. O., S. LVI-LVIII. Vgl. *Ders*, a. a. O., S.19-22 u. 32-33.
- (13) Wolfgang Bonsiepen, a. a. O., S. LX. Vgl. *Ders*, a. a. O., S.36-37.
- (14) G. A. Gabler, *Lehrbuch der philosophischen Propädeutik als Einleitung zur Wissenschaft. Erste Abteilung: Kritik des Bewußtseins*, Erlangen 1827.
- (15) H. F. W. Hinrichs, *Die Genesis des Wissens*, Heidelberg 1835.
- (16) Karl Rosenkranz, *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben*, Berlin 1844.
- (17) Wolfgang Bonsiepen, a. a. O., S. LXII. Vgl. *Ders*, a. a. O., S.38.
- (18) *G. W. F. Hegels Werke. Vollständige Ausgabe durch einen Verein von Freunden des Verewigten*, Berlin 1832-1845, Bd. 2, hrsg. v. J. Schulze, Berlin 1832, 1841.
- (19) I. H. Fichte, *Zu Hegels Charakteristik*, in: *Zeitschrift für Philosophie und spekulative Theologie XII*, Tübingen 1844.
- (20) Ch. H. Weisse, *Die drei Grundfragen der gegenwärtigen Philosophie*, in: *Zeitschrift für Philosophie und spekulative Theologie I*, Tübingen 1837.
- (21) H. M. Chalybäus, *Phänomenologische Blätter*, Kiel 1840.
- (22) Rudolf Haym, *Hegel und seine Zeit*, Berlin 1857, S.232.
- (23) Rudolf Haym, a. a. O., S.238.
- (24) Rudolf Haym, a. a. O., S.243.
- (25) H. Levy, *Die Hegel-Renaissance in der deutschen Philosophie mit besonderer Berücksichtigung des Neukantianismus*, Charlottenburg 1927.
- (26) Wilhelm Dilthey, *Die Jugendgeschichte Hegels*, Berlin 1905.
- (27) Georg Lasson, *Einleitung des Herausgebers zu seiner Ausgabe der Phänomenologie des Geistes*, Leipzig 1907, 1921 u. 1927.
- (28) Richard Kroner, *Von Kant bis Hegel Bd.2*, Tübingen 1924.
- (29) Hermann Glockner, *Hegel Bd. 2*, Stuttgart 1940.

- (30) Theodor Haering, *Die Entstehungsgeschichte der Phänomenologie des Geistes*, in: *Verhandlungen des dritten Hegel-kongresses*, hrsg. v. B. Wigersma, Tübingen/Haarlem 1934, S.119f. Vgl. Ders., *Hegel. Sein Wollen und sein Werk Bd.2*, Leipzig/Berlin 1938.
- (31) Johannes Hoffmeister, Einleitung des Herausgebers zu seiner Ausgabe der Phänomenologie des Geistes, Leipzig 1937⁴, Hamburg 1949⁵ u. 1952⁶.
- (32) Kuno Fischer, *Geschichte der neuern Philosophie Bd.8*, Heidelberg 1901.
- (33) Nicolai Hartmann, *Die Philosophie des deutschen Idealismus Bd. 2*, Berlin/Leipzig 1929.
- (34) Georg Lasson, a. a. O., S. XV ; R. Kroner, a. a. O., S.382 (in Anmerkung).
- (35) Wilhelm Purpus, *Zur Dialektik des Bewußtseins nach Hegel*, Berlin 1908.
- (36) Casper Nink, *Kommentar zu den grundlegenden Abschnitten von Hegels Phänomenologie des Geistes*, Regensburg 1931.
- (37) D. F. Strauß, *Gesammelte Schriften Bd.10*, Bonn 1878, S.224.
- (38) Ludwig Feuerbach, *Gesammelte Werke Bd.9*, Berlin 1982, S.35.
- (39) Karl Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844*, zuerst: *MEGA I 3*, Berlin 1932, jetzt: *Marx Engels Werke Ergänzungsband 1*, Berlin 1968, S.571.
- (40) Georg Lukács, *Der junge Hegel*, Zürich 1948.
- (41) Herbert Marcuse, *Hegels Ontologie und die Grundlegung einer Theorie der Geschichtlichkeit*, Frankfurt a.M. 1932.
- (42) Herbert Marcuse, *Reason and Revolution*, New York 1941.
- (43) Herbert Marcuse, *Neue Quelle zur Grundlegung des historischen Materialismus*, in: *Die Gesellschaft Bd.2*, 1932. Nachdruck in: H. Marcuse, *Ideen zu einer kritischen Theorie der Gesellschaft*, Frankfurt a.M. 1969.
- (44) Ernst Bloch, *Subjekt-Objekt*, Frankfurt a.M. 1962.
- (45) Ernst Bloch, *Das Faustmotiv der Phänomenologie des Geistes*, in: *Hegel-Studien 1*, Bonn 1961.
- (46) Jean Wahl, *Le malheur de la conscience dans la philosophie de Hegel*, Paris 1929.
- (47) Alexandre Kojève, *Introduction à la lecture de Hegel*, reunites et publiées par R. Queneau, Paris 1947.
- (48) J.-P. Sartre, *L'être et le néant*, Paris 1943; Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris 1945.
- (49) *La Phénoménologie de l'Esprit*, trad. par J. Hyppolite, Paris 1939-1941.
- (50) Jean Hyppolite, *Genèse et structure de la Phénoménologie de l'Esprit de Hegel*, Paris 1946.
- (51) Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 1927, Tübingen 1979.
- (52) Martin Heidegger, *Hegels Begriff der Erfahrung*, in: *Holzwege*, Frankfurt a.M. 1950.
- (53) Martin Heidegger, *Hegels Phänomenologie des Geistes, Gesamtausgabe Bd.32*, Frankfurt a.M. 1980.
- (54) Martin Heidegger, a. a. O., S.42 u. 54.
- (55) *The Phenomenology of Mind*, transl. with an introduction and notes by J. B. Baillie, London 1910, 1931².
- (56) *The Phenomenology of Spirit*, transl. by A. V. Miller with analysis of text and foreword by J. N. Findlay, Oxford 1977.
- (57) J. N. Findlay, *Hegel. A Re-examination*, London/New York 1958.
- (58) Richard Norman, *Hegel's Phenomenology. A Philosophical Introduction*, London 1976.
- (59) H. P. Kainz, *Hegel's Phenomenology. Part I: Analysis and Commentary*, Alabama 1976, *Part II: The Evolution of Ethical and Religious Consciousness to the Absolute Standpoint*, Ohio 1983.
- (60) Walter Kaufmann, *Hegel. A Reinterpretation*, Garden City/New York 1965.

- (61) Jacob Loewenberg, *Hegels Phenomenology. Dialogues on the Life of Mind*, La Salle (Illinois) 1965.
- (62) Merold Westphal, *History and Truth in Hegel's Phenomenology*, Atlantic Highlands/New Jersey 1979.
- (63) H. F. Fulda u. Dieter Henrich, *Vorwort*, in: *Materialien zu Hegels Phänomenologie des Geistes*, Frankfurt a. M. 1973 ; G. Göhler, *Die wichtigsten Ansätze zur Interpretation der Phänomenologie*, in: *G. W. F. Hegel, Phänomenologie des Geistes*, Frankfurt a. M./Berlin/Wien 1970 u. 1973².
- (64) 拙論「現代ドイツにおけるヘーゲル『精神現象学』の研究史」(『目白大学人文学研究』第1号、2004年、目白大学人文学部編、1～10頁)を参照されたい。